

1900年代初頭のWalesの教科書 (その1)

A Textbook Used in Wales in the Early Year 1900s (1)

ウェールズの教科書 / イングランドの帝国主義 / 教育

野澤 重典

NOZAWA Shigenori

I. はじめに

小論の目的は、1900年代の初頭に英国ウェールズで使われていた教科書 (*The Little Red History of Wales*. Book II.) の記述内容を紹介し、当時のイングランドの為政者がどのような目的でウェールズ人を教育していたかを考察することである。その教科書は、Maestirという田舎町に設立された St. Mary's Board School (1880-1916) で使われていたものである。現在その学校は、Walesの首都CardiffのSt. Fagansにある「ウェールズ生活博物館」(Museum of Welsh Life) に保存されている¹。教科書の著者は、WILLIAM GLOVER、発行は1911年と記されている。本教科書を使って学習していた生徒は、その当時この学校では、5才から14才までの生徒がひとつの教室で学習していた (Eurwyn Wiliam, 1995, p. 36) ので正確なことはわからないが、この博物館のcustodianのひとりであるCalbin Rees氏の説明によると、8才程度 (3rd or 4th year) の生徒だったという。

II. 歴史的的背景

教科書の中身を考察する前に、ウェールズとイングランドをめぐる歴史的背景やその当時の教育観について、中村 (1982, 1989) 及び Nash (1991) を参考に若干の考察を加えておきたい。というのは、「教育は時代の為政者の政治的、文化的、戦略的意図が端的に反映されるもので、特にWalesはその当時、England の国家主義的イデオロギーに多大に影響を受けていた」(中村, 1989) と考えられるためであり、結果的に、それは教科書の記述にもある程度影響があったことが容易に推察されるからである。

中村 (1982, p. 104) によると、「イングランドとウェールズをめぐる歴史は、英語によるウェールズ語の侵略の歴史でもある」という。そして、その侵略史の中でもきわだって重要な事件が2つあるという。「併合法」(Act on Union) の発布 (1536) と通称 *Blue Books* と呼ばれる『ウェールズの教育事情報告書』の刊行 (1847) の2つである。小論では、教科書の記述の紹介を目的としているので、この2つに加えて教育法 (Education Act) の施行 (1870) を取り上げることにする。

まず第一に、併合法 (Act on Union) の発布 (1536) であるが、事実上、この法律により英語が公用語として規定され、ウェールズ語が公的な地位を失ったという点で重要な意味をもつ。このことは、中学校用外国語検定教科書にもその記述がある。

But Wales was conquered by England, and in 1536 through the Act of Union it became a part of England. The law made English the 'official' language. (*NEW CROWN* 3, p. 81)

また、Nash (1991, p. 3) によれば、当時の人口の90%以上の人々がウェールズ語を話していたにも関わらず、grammar schoolではウェールズ語の教育はほとんど推奨されていなかったという。その最大の要因は、併合法により、教育の中心がラテン語から英語に取って代わられたことにあると指摘している。

しかし、ここで注目することは、少数ではあったが、ルネッサンス期の新しい知的風土の追い風を受け、ウェールズ語の地位向上及び表現の確立に努力した学者たちがいたという次の記述であろう。

Yet, in spite of this, a small but determined group of scholars fought to establish Welsh as a language of status and expression within the new intellectual climate of the European Renaissance. (Nash, 1991, p. 3)

このような努力がなされたことに加え、当時 formal education を受けられたのが裕福な家庭のごく少数の子供に限られていた教育事情が重なり、それから約200年後の1800年代半ばでも、70%近くの人々がウェールズ語を使っていたという。

ところが、1847年通称 *Blue Books* と呼ばれる『ウェールズの教育事情報告書』の刊行は、その後のウェールズ語を話す人々に多大な影響を与えた。その報告書は次のことを目的としている。

They (=Three commissioners) were charged with examining all aspects of education in Wales, and also the conditions of the schoolrooms and pupils' homes; sanitary provision, if any; teaching standards; and draw conclusions on the moral standards of the population. (Nash, 1993, p. 14)

すなわち、*Blue Books* はウェールズの教育事情を事細かに実態調査を試み、それを報告したものである。ところが、そこから導き出した結論は、次のように表現されている。

The Reports highlighted the shortcomings of many school buildings and teaching standards but also placed undue emphasis on the children's poor command of the English language which was seen as an obstacle to their betterment. (ibid, p. 16)

さらには、

..., the valuable research carried out by the commissioners in identifying the poor condition of so many school buildings, the lack of teaching equipment, sanitary arrangements and the low standards of teaching was overshadowed by their excessive emphasis on the children's inability to answer often misleading questions through the medium of English, and by the commissioners' inability to grasp the nature and complexity of Welsh life and society. (ibid, p. 16)

すなわち、この調査の結果は、「ウェールズ語がウェールズの発展、進歩を妨げている」と結論づけているものであり、それもあり、バイアスのかかった誇張した書き方であったことが読み取れる。言い換えれば、ウェールズ語の使用を禁止することで、民族、社会、文化を発展させようと考えられていたことが類推できる。そして、ウェールズ語の使用を禁止するために、様々な方法が採られたようである。有名なものに、"WELSH NOT"あるいは"W.N."という木片を首からかけさせるというものがある。

Various methods were adopted to discourage children from speaking Welsh at school. The most notorious or best known was the use of the 'Welsh Not' or 'Welsh Stick'. This was a small piece of wood with the letters 'W.N.' or 'WELSH NOT' or similar carved upon it. (ibid. p. 17)

この他、次のような罰則を与えていた学校もあるという。

..., teachers used equally sinister methods to dissuade pupils from using the Welsh language. At Neuaddlwyd, in Dyfed, during the early nineteenth century, the master, a Dr Phillips, expected his monitor to collect at least 9.5 d. (4p) each week in fines from

pupils for rowdy behaviour and for speaking Welsh so that he could buy his usual 2 oz. supply of tobacco! Other punishments included making the offending child stand on one leg in a corner with the "Welsh Stick" in his mouth; or, as recorded in Cardiganshire, making the child stand on one leg on a bench, holding a heavy Bible in one hand. (ibid, p. 19)

このように当時のイングランド人はウェールズ人に対して様々な制裁を加えることで、学校をはじめとするあらゆる公的な場所で、Wales 語の使用を一切禁止したのである。このような制裁の中で、生徒たちの中には、その punishment から逃れるために、友達を裏切る行為をしたと回想する人もいるという。1887年に書かれた *Montgomerysher Collections* の中で、Powysという作家は、当時を振り返り次のように書いているという。

Many were the stratagems used by the wearers in inveigle others into trouble, and so rid themselves of the odious burden. Boys would betray their best friends. No child could rest happy with this token of sure punishment hanging round his neck. They strained their ears, even for whispers. A few teachers even made children wear it home from school. (ibid, p. 19)

これらの punishment がいかに厳しいもので、教育的でなかったが伝わってくる。

そして次に登場するのが教育法 (Education Act) である。"Education Act laid the foundations for a general education system that could be suited to the needs of both the rural and urban population of Wales". (ibid, p. 20)と記されているように、イギリスではこれによって義務教育が始まったわけだが、それがウェールズ全体に行き届いたのは、New Education Act (1902) が導入されたころだということ。つまり、この時期までには、ウェールズにもイングランドと同じ教育が施行されることになったというわけである。すなわち、「教育用語も英語になった」(中村, 1989, p. 441)のである。

この当時の教育観は次のように表現されている。

Education was regarded as synonymous with a knowledge of English, and without the language one could not hope to 'get on in the world'.

No attempt appears to have been made to try to reach the people through their own language, rather than imposing upon the children a language foreign to them in the hope that this would lead to the universal advancement and betterment of the population, and particularly of the labouring classes. (Nash, 1991, p. 14)

つまり、英語の能力を高めること、イコール、教育と見なされていたのである。

このように見てくると、Act of Union から Education Act に至るまでに、イングランドはウェールズを併合し、その母語使用を禁止し、ウェールズの教育を否定した上でイングランドの教育を押しつける、などの政策をとってきたことになる。このことに関して中村(1982, p. 86)は、ウェールズ人は「十分にイングランド(人)及び英語に対して劣等意識を植えつけられてきた」と述べ、それは「イングランドの帝国主義的指導と政策の当然の帰結」であったとした上で、「ウェールズはイギリス国内の植民地 (internal colonialism)」になったと結論づけている。

このような政策がとられてきただけに、ウェールズ人のイングランドに対する抵抗感は相当なものであったことが予想される。さらに言えば、敵対心にも似た心情が芽生えていたと言っても良いだろう。次章で紹介する教科書は、このような歴史的背景のもとで出版されたものだけに、その記述内容がいったいどのようになっていたは大変興味深い内容である。

III. 教科書の記述内容とその考察

本教科書は歴史の教科書であるが、10章からなるその記述は、1282年のイングランドとウェールズの併合に関する内容がその大半を占めている。記述内容を見てみると、その特徴は次の3点に集約でき、特に第1章にそれが顕著に現れている。

- A. イングランドとウェールズの併合は、武力による「征服」ではなく「統合」であったと記述すること。
- B. ウェールズの文化・民族・言語の良さを認める内容であること。
- C. ノルマン人(イングランドが併合する前に支配していた民族)の行為・文化・民族を否定すること。

この3つの視点に沿って、以下、具体的な記述内容を紹介しながら考察を加えることにする。

A. 武力による「征服」ではなく「統合」であるとする内容

次に示す記述は、1282年のイングランドによるウェールズ併合に関するものであるが、この後の抵抗がいかに激しいものであったかは、エドワード1世が長子を Prince of Wales と呼び、その地を領有した有名な話からも想像できる。武力による征服 (conquer) であったという表現を適切な表現ではないと否定した上で、事実は統合 (fusion) であったのだという表現で記述されているところが注目される。

When it is said that Edward I. conquered Wales, the expression is not strictly accurate: it would be more correct to state that he greatly extended the power of the crown, and paved the way for what was to come; that is, a final and complete fusion of England and Wales. (p. 5)

次の記述には、統一を示す語句 (united, union, the two countries are one, etc) が繰り返し使われている。そして、統一されたことはウェールズにとって良かったことだということを印象づける記述になっている。

Wales is, we say, united to England; and union is strength. The two united countries are stronger than either could possible have been apart....

Wales, then, has gained in strength by the union. And she has not lost her freedom. No one can now say that a Welshman is not every whit as free as an Englishman,... The two countries are one, and the two people are one — one is every right and privilege. (pp. 11-12)

さらに、併合はイングランドとウェールズによる戦争(war)ではなかったのだとした上で、政治的に統合 (politically joined) されたことはウェールズにとって良かったことだとする明確な記述がある。

It is well to remember that the war between Edward I. and Wales was not, strictly speaking, a war between England and Wales. In the English army there were many Welshmen, patriotic Welshmen too, who really and truly loved their country, but thought it would be best for Wales if she were politically joined to England. (p. 8)

これらの記述は、ウェールズ人のイングランド人に対する抵抗心を軟化させるために、自分たち(イングランド人)の過去の行為を「正当化」あるいは「説得」することを目的に書かれていると考えて良いだろう。

B. ウェールズの民族・文化の良さを認める内容

ウェールズの民族・文化・言語の良さを認めるという内容は、II章で述べたウェールズ語に対する

政策や帝国主義的な見方を考えると、そこにはたいへん大きな食い違いがある。母語や自民族に対する劣等感を植え付ける政策を強めるかたわら、教科書には逆にウェールズ語やその文化、民族の良さを取り上げるといふ、いわば矛盾した記述が見られるのである。

次の記述は、当時、ウェールズはイングランドと同程度に文明化 (civilized) されていたと表現している。

...for we argue that it is better for a country to be ruled by a civilised power than by one which is uncivilised. But with Edward I. it was not a case of a civilised country subduing an uncivilised one; for on the whole, Wales was then, to say the least, quite as civilised as England. (p. 9)

このcivilizedに関連して、次の記述では、その具体的な例として、ウェールズの法律を取り上げている。そして、ウェールズの法律は、イングランドのものと比較して、簡単 (simple) で人間的 (humane) で公平 (fairer) であると述べている。

Her (=Welsh) laws were more simple, often more just, and always more humane. English law gave the eldest son a preference in the inheritance of property: Welsh law was surely fairer, for it gave an equal share to each of the sons. (p. 9)

また、ウェールズの法律は、犯罪人に対しても不必要な残酷な扱いをしていないことも記されている。

Welsh law, when it condemned a man to death, executed him without circumstances of needless brutality. (p. 9)

言語に関しては、次の記述で、ウェールズ語が社会の発展を妨げるものであるとした評価とは全く相反する評価をしていることがわかる。

In love of poetry and music, too, Wales could compare favourably with the England of those days. Not only had she a distinct literary language, but literature was appreciated and cultivated in a far greater degree than in England. (p. 10)

このように、ウェールズ人のイングランドに対する抵抗心を抑えるために、ここでは、相手の文化や言語の良さ認め、褒め称えることでそれを遂行しようとする姿勢が浮き彫りになっている。

C. ノルマン人の行為・文化・民族を否定する記述

A. で述べた通り、Edward I. による征服は統合であり、侵略ではなかったと繰り返し強調している一方で、ノルマン人によるそれは征服であったと明記している。また、自分たちが統合する前にウェールズはすでにノルマン人に侵略されていたのだ、と第3者の行為を否定し、自分たちの行為を正当化する表現になっている。

Long before Edward's time, the Norman barons had already seized large tracts of land. Along the valleys of the Clwyd,...they had great possessions, and these possessions needed no fresh conquering: they were conquered already. (p. 5)

さらに、ノルマン人の法律を残酷だ (cruel) と断じた上で、その法律を制定した民族も残酷だと結論づけた表現がある。その残酷な行為の例として、ウェールズの少年が首吊り (hang) に処された例をあげているが、この事例は、ウェールズの子どもにとって大変ショッキングな表現と言えるであろう。同じ民族の子どもに対する同情と感情移入は大変大きかったことであろう。それはすなわち、ノルマン人に対する敵対心をあおり、その民族を否定するにはたいへん効果的だったと言えよう。

The nature of a country's laws often shows us the character of the people who make them. The Norman laws were cruel: so were the Normans themselves. A Welshman

of those days might do savage deeds in the heat of battle, but it was very seldom he would do them when the fight was over: he was not at all given to cold-blooded cruelty. With the Normans this was far otherwise. They often disfigured the bodies of dead foes; and in the reign of John they hanged a little boy, a Welsh hostage, at Shrewsbury, because his father had rebelled against them. (p. 10)

このように、1900年代初頭の歴史教科書は、ウェールズとイングランドの併合は統合であり武力による征服・侵略ではないことを繰り返し強調している。そして、イングランド人に対する抵抗感や敵対心を抑える、あるいは、他に向けさせるために、イングランド人の行為を正当化し、ウェールズの民族・文化・言語を認め、褒め称える一方、その前支配していた民族であるノルマン人にそれを向けさせようとする手法がとられている。すなわち、自分の行為を正当化し、相手の文化を受容し、敵対心を第3者に向けようとする3つの視点で教科書が書かれていると総括できる。いわば、この教科書は、すべてイングランド人の視点からイングランド人に都合よく記述された内容であることが理解される。

． まとめ

中村(1989, p. 442)は、強大な国家を建設するためには、その構成員、特に若い世代を政治的にも文化的にも同化、あるいは、均一化することが必要であると述べている。教科書はそれを達成するために最も効果的な教育上の道具である。

本稿では、イングランドとウェールズの歴史的背景を概観した上で、1900年代の初頭に刊行・使用されていた教科書の記述内容について考察してきた。そして、その記述内容はイングランド人からの視点から書かれたもので、イングランド人に対する抵抗感を和らげることを目的に書かれているであろうことを考察してきた。いわばイングランド帝国主義手法の一端をかいま見たこととなる。

本教科書は、時の為政者がマイノリティーに対してどのような目的でどのように教育してきたかを見る貴重な資料となるであろう²。

(長野県更埴市立西中学校)

注

- (1) 本教科書は、筆者が文部省主催による「平成9年度中学校及び高等学校英語担当教員海外派遣研修(12ヶ月)」の研修の機会を利用して、当博物館を訪問したときに入手したものである。資料入手にあたり、同博物館のEducation Departmentに所属するJayne Murphy氏に多大なご協力をいただいた。また、「WELSH NOT」の木札をはじめ、その他のPunishmentに用いられた具体物などの写真撮影も快く承諾していただいた。(Appendix 参照)。ここに感謝の意を表したい。
- (2) ここに紹介した教科書以外にも、同時期に発行・使用された教科書、*DESCRIPTIVE GEOGRAPHY READERS. BOOK*、及び*BOOK* のコピーが筆者の手元にある。この2冊の教科書は、いわば世界史の教科書である。これらは当時のイングランドの為政者が世界の国々をどのように見ていたかを考察する上で、貴重な資料と言えよう。いずれ稿を改めて紹介したいと思う。

野澤 重典. (1998). 「1900年代初頭の Wales の教科書 (その1)」
『コミュニケーションと言語教育 (SUURCLE) 第1号』, 1-8.

引用文献

中村 敬. 1982. 「ウェールズにおける言語侵略」『成城文藝』第101号.

中村 敬. 1989. 「学校教育の成立とウェールズ語の衰退」『成城大学文芸学部創立三十五周年記念
論文集』

Nash, G. 1991. *Victorian School-days in Wales*. Univ. of Wales Press.

NEW CROWN 編集委員会. 1997. 『NEW CROWN Teacher's Manual 解説と指導』三省堂.

William, E. 1995. *Museum of Welsh Life (2nd Printed)*. National Museum of Wales.

Appendix

野澤 重典. (1998). 「1900年代初頭の Wales の教科書（その1）」
『コミュニケーションと言語教育 (SUURCLE) 第1号』, 1-8.